

「高井」第二〇八号別刷

2019.8./

中野市高遠山古墳と前方部確立型古墳の展開

松
澤
芳
宏

中野市高遠山古墳と前方部確立型古墳の展開

松澤芳宏

一 高遠山古墳の私見と前方部付設型古墳の 発展形態

中野市高遠山古墳は東日本最古級の前方後円墳とされている。ただし、東国最古級の古墳ではない。

筆者の考え方によれば、既に墳丘ある墓所、つまり古墳をつくる風習が大陸から日本に伝来し、弥生時代にも古墳が存在する。

北信濃北半でも、木島平村の根塚遺跡にいくつかの弥生古墳があるし、この地方にもある周溝墓が墳丘をもつことは明らかである。周溝墓も古墳の一種の低墳丘古墳であり、それが弥生時代に属するのなら弥生古墳となる。

周溝墓は古墳時代にもあるが、それは古墳に間違いな

い。方形周溝墓ならば方墳であり、円形ならば円墳である。ただし、周溝墓といわれているものに低墳丘古墳が多いことは事実である。



中野市高遠山古墳を東方より望む。
昭和56年松澤芳宏撮影。

高遠山古墳は完存時の測量で全長55mであった。後年の緊急発掘報告書では、全長51・2mと推定しているが、誤りである。どうして破壊された前方部の長さが分かるのか

疑問であり、完存時の測量値を尊重すべきだ。

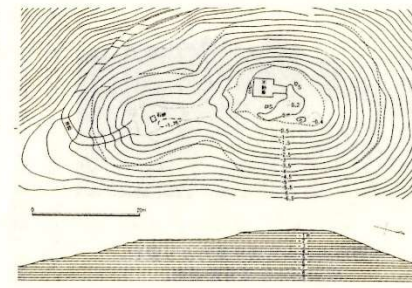
したがって、全長約五五m、後円部長径三二・八m、短径は二五・六m、高さ四m、前方部高さ約二・五mである。前方部の前端は、完存時には明確な立ち上がりがあり、高遠山古墳は、前方部付設型古墳のうち、前方部確立型古墳に属する。つまり前方後円墳として墳形が確立した分類に属し、前方後円墳と呼べるものと思われる。

ここで注意しなければならないのは、前方後円墳は墳形の確立であって古墳の確立ではないということだ。この認識がないと、前方後円墳の波及が古墳の波及と勘違いされ、まことしやかに、畿内政権やヤマト政権との関係が論議されることになりかねない。

中野市には高遠山古墳と同時期の布留〇〇一式土器(寺沢薫案布留〇〇四式のうち)併行時期の、全長約一五m前後の安源寺城一号墳がある。

これは三世紀半ば、四世紀前半の、いずれかに属する前方部祖形型古墳であり、前方後方墳の兆しがあるもので、模式的には高遠山古墳以前のスタイルである。

間違えられやすいのは、安源寺城一・二号墳が墳丘墓であり、高遠山古墳が古墳であるという見方である。こ



高遠山古墳削減以前の墳丘実測図
出典：田川幸生・松澤芳宏「蟹沢古墳・高遠古墳・姥懐古墳」
長野県史『主要遺跡』1982

れは世界的なことをもった古墳定義に合致しない、日本独自の論理からくる考え方である。いまだにこの論理を採用している学術界について

は腹立たしい。

安源寺城一・二号墳は完全なる古墳であり、とくに一号墳は低墳丘があることが確認されている。いわば低墳丘古墳なのであり、弥生時代にも属しないことは出土土器の型式が物語っている。

また、古式前方後円墳が畿内で多く見られるのに対し、前方後方墳が東海地方で成立したとする説もある

が、これもおかしい。

滋賀県神郷亀塚古墳など、琵琶湖沿岸地方では、弥生時代末期三世紀前半ごろともされる前方後方墳があるが、今度は滋賀県が前方後方墳の発祥の地とする意見もある一方、従来の説を援用し、東海地方に関係ある狗奴国連合に関係する古墳であるとの説も出ている。

本末転倒、東海地方以外でも最古級の前方後方墳が発見され、最古級前方後方墳の分布圏が変わったのである、それを何でもかんでも狗奴国政権に結びつける論理は成立しない。

ちなみに、後記する福井県安保山四号墳は、弥生時代



前方部付設型古墳の発展形態
松澤芳宏2007「古墳の定義と墳丘墓名称の廃止について」雑誌『信濃59-2』による

後期後半の、畿内第V様式後半土器(二世紀末前後)併行の前方部確立型古墳であり、異形ではあるが前方後方墳に含められるものである。それを見ても、前方後方墳が東海地方発祥とは限らないことが分かる。

東海地方に最古級の前方後方墳が多いのは、濃尾平野という広大な沖積地が都会化し、緊急発掘調査が急増しているからである。数の上で、北陸地方との比較はできない。長野県の中南信で、東海系の土器を伴う前方後方墳があるのは東海地方に近い地域色である。

北陸に近い飯山市法伝寺二号墳(前方後方墳)などは、北陸の月影二式の土器が発掘されている。前方部祖形型古墳である安源寺城一号墳も北陸系の月影二式土器を伴う。

北陸・東海地方で前方後方墳が多いのは、弥生時代に方墳が流行しているからで、そこに前方部付設型古墳の発展形態方式が加わったためである。

また畿内では庄内式期の桜井市メクリ一号墳など前方部確立型前方後方墳があり、それ以前のスタイルの前方後円形の前方部祖形型古墳(橿原市瀬田遺跡円形周溝墓)もある。つまり畿内では前方部祖形型古墳から前方部確

立型古墳への形態変遷をたどるし、同じような形態変遷が瀬戸内地方にも認められている。

つまり、畿内でも瀬戸内でも、それ以外の地方でも、前方部付設型古墳の発展形態が観察され、纏向型古墳が前方後円墳の発生とする論理は必要ではない。

纏向型前方後円墳として位置づけられている主体墳丘に対する前方部比率が小さくなり、前線で開く特徴は、実は前方部祖形型古墳から前方部確立型古墳の変遷中に見られる前方部が短い全国的比率現象に過ぎないのだ。纏向型前方後円墳の波及論理自体も成立しないのだ。

前方部が小さいのは前方部の変遷が陸橋部の発展形態として観察されるからである。陸橋部は主体墳丘に対して狭小であることは通有な現象である。また前方部前線で幅が開くのも、掘り取った周溝や他地点からの、主体墳丘への土砂の搬入が便利であるからである。

また、初期前方後円墳に全長八〇m以上のものが成立するのは、巨大古墳では前方後方墳よりも、設計がたやすく、土量も節約できるからである。それが畿内型古墳として完成し、畿内型古墳が地方の各地にも、若干、影響を及ぼすことはあり得る。

しかし、巨大前方後円墳が各地の前方部確立型古墳を成立させたのではなく、それ以前に、前方部付設型古墳の発展形態が日本列島各地で確認できるのである。

つまり、この現象は文化なのである。福井県安保山四号古墳は弥生時代後期後半に属し、異形でありながら前方部確立型古墳の最古様式であることは後記する。

このように、北陸でも最古様式の前方後方墳があり、中野地域の前方後方墳の発祥を東海地方からのみ波及したとする説が、妥当ではないことが分かると思う。

前方部祖形型古墳の安源寺城一・二号墳では、地元の弥生時代後期箱清水式系土器・東海系土師器・畿内系土師器・北陸系土師器の諸要素が混在しており、一概に東海系文化の波及と片付けられないものであることは明白である。

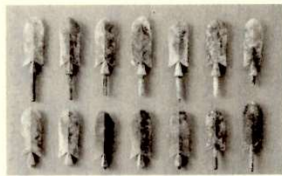
ただ言えることは、国家統一の動乱期に各地各様の文物様式と古墳の諸形態が波及しあい、文化交流が助長されたことである。

それが畿内政権の関与したものとは断定できず、畿内政権等の軍事行動に伴う、人の動きによる自然発生的な文化の波及と推定している。

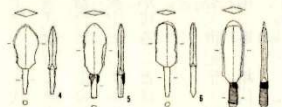
ただし、三角縁神獣鏡などが埋藏された古墳については、畿内型古墳であるかないかの論議は必要と思ってしまう。ちなみに、高遠山古墳が前方後円墳であることのみで、畿内型であるとは断定できないと思う。

高遠山古墳の後円部は楕円形の俯瞰形態をなし、通常の正円形の前方後円墳とは異なる。後円部の中央部に雑然とした礫を壁面とするやや方形（長方形状に広がる可能性もあるという）の土坑があり、さらに、その底面に前方後円形の主軸に直交して二つの埋葬施設がある。

このうち、切り合い関係から一号棺が古く、土壇内粘土椀内の削り抜き式木棺と推定され、鉄剣三・銅鏃四・



奈良県桜井市ホケノ古墳出土の銅鏃



中野市高遠山古墳出土の銅鏃

縮尺は高遠山古墳銅鏃のみに適用

出典：ホケノ山古墳境調査概報・福原考古学研究所編2001 高遠山古墳発掘概報・中野市教育委員会2000

鉄鍬鋤先一・鉄槍鉋一・管玉四・ガラス小玉五が出土した。

二号棺は、土壇内礫床上の木炭椀で、割竹形木棺と推定され、鍛造有袋鉄斧一・鉄槍鉋一・鉄刀子一が出土している。土壇の一方の小口に平石を立て、両小口上を複数の平石で覆っている。平石は椀の側面上にも少し覆われており、たぶん木棺の押さえか、土壇上の木蓋があったと推定される。

この古墳の主体部直上の盛土内から、葬送儀礼に伴う土器が、破碎散布された状態でたくさん発見されている。その土器をみると、在地の箱清水式系土器と、外来系の古式土師器がある。

古式土師器は安源寺城一号墳と同様な時期かとも思われるが、仔細にみると、円孔のある高坏または器台の脚部は直線的に開くものと、外反しながら開くものがある。これは安源寺城一号墳と共通性をもつが、坏部の器形が不明であり、詳細な時期が分からない。

壺も頸から肩にかかる位置に細い突帯があるものも共通性を持つ。この突帯はパレススタイル土器や庄内式垂下口縁壺に見られる古い要素だが、突帯付近の文様が消

えていることなど、やや下降した年代が与えられる。総合すると、概ね布留〇〇一式併行に該当する。

外反脚の高坏あるいは器台は、この地方では後代まで残り、これだけで時期の決定はむずかしいと思う。しかし多量の箱清水式系土器が残ることは、箱清水式期に続く時期と推定される。

布留〇式一式の年代を三世紀半〜四世紀前半のいずれかとみると、高遠山古墳の築造年代は、前代の根塚遺跡B区の箱清水式期の年代を参考にして、三世紀半〜四世紀前半のいずれかと考えている。

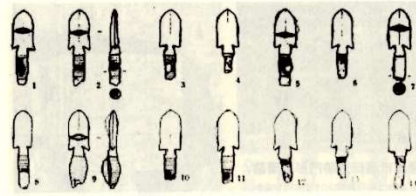
高遠山古墳銅鏡については、前期古墳に通有な銅鏡型式に共通するものであり、奈良県ホケノ山古墳のものよりも新しい型式が多く、それを勘案すると高遠山古墳の年代は、通説の四世紀前半前後が妥当であるかも知れないが後考を待つ。

このことは、近畿土器編年よりも、東国の土器形態の実年代が下降するかも知れないという重大な問題をひかえている。

ここで、矢柄を受ける部分の「のかづぎ鏡被」のある銅鏡について、ホケノ山古墳では多量の鏡被のある逆棘銅鏡が

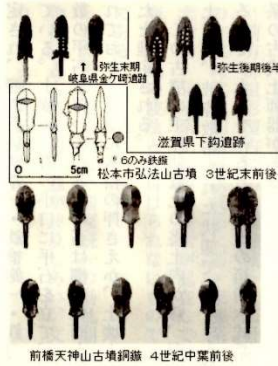
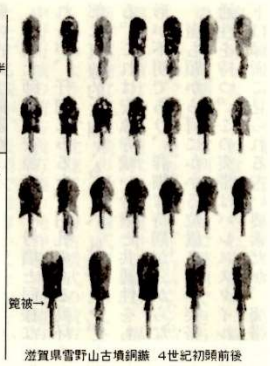
型の逆棘鏡被銅鏡以前に、既に滋賀県・下鈎遺跡では弥生後期後半に鏡被多孔銅鏡が出現しているし、弥生後期後半には逆棘銅鏡がかなり盛行している。

古墳時代前期初頭前後の広島県弘住三号古墳では、鉄鏡ではあるが逆棘鏡被鏡が数点出土している。この資料はホケノ山古墳逆棘鏡被銅鏡に形が酷似する。また三世紀末前後の松本市弘法山古墳でも柳葉形鏡被鉄鏡がある



広島市弘住三号古墳鉄鏡抜粋
出典：『弘住遺跡発掘調査報告書』広島市教委 1983

(図示)。四世紀初頭前後とされる滋賀県雪野山古墳でも柳葉形鏡被銅鏡が出土している。銅鏡のみならず、鉄鏡の型式を観察すれば、ホケノ山古墳型逆棘鏡被銅鏡が古墳時代前期初頭に存在しても何ら不思議はない。逆棘鏡被銅鏡の存在をもって、ホケノ山古墳の古墳時代前期初頭の



弥生時代後期後半から古墳時代前期への銅鏡概念図
主に柳葉形鏡と逆棘鏡と、鏡被（のかづぎ）鏡。6のみ鉄鏡
出典一覧：『清流の国ぎふ』（ウェブ）、栗東市教委、『弘法山古墳』、『文化遺産オンライン』（ウェブ）、『東国の古墳』

位置を疑うことは出来ないものである。

逆棘銅鏡が多量にあるホケノ山古墳と柳葉形銅鏡を出土する高遠山古墳では時期差があることは疑う余地がない。

また、高遠山古墳では柳葉形銅鏡が、やや発展し、先端近くで幅の膨らみが増すタイプがあり、四世紀初頭前後とされる滋賀県の雪野山古墳・四世紀中葉前後とされる前橋天神山古墳に類似品がみられる。さらに高遠山古墳の年代が四世紀前半前後とされる通説を補強できる現象であろう。

ところで、高遠山古墳が前方後円墳であること、また、割竹形木棺が採用されていることから、畿内の影響とみる人が多いが、北陸では割竹形木棺は、畿内型古墳に先行する墓制とされ、この種の木棺が畿内型古墳の影響のみとはいえない。朝鮮半島の丸太木棺の影響で、北陸とその近接地域では早くから小型割竹形木棺が流行していたのであろう。木島平村の根塚遺跡の小型割竹形木棺も弥生時代である可能性も検討すべきである。

前方後円墳の墳形自体も畿内からの影響のみとはいえず、内部主体の礎床上の木炭柳土壘も畿内では稀有のもの



のであり、高遠山古墳は完全な畿内型古墳といえないことは明白である。高遠山前方後円墳の成立に、この地域の円形弥生古墳の影響もかかわっているとは私は考えている。ただ高遠山古墳が畿内政権の地方伸張の一環として成立したのかどうかは、完全否定はできない。

別注視されるべきものではない。これまでの言を総合して、私は、ここに大きな提言を行うことになる。すなわち、古墳の墳形は前方後円墳・前方後方墳などがそれぞれ独立して成立するのではなく、古墳築造過程や祭祀からくる前方部の変遷は日本列島で主体部墳形にこだわらず、同じような変遷があるということである。

私の言う前方部付設型古墳の諸段階が、古墳形態の変遷であり、そのどれをとっても古墳であり、前方後円墳や前方後方墳の出現時期から古墳とする二〇世紀古墳定義の通説に異議を申し立てたい。そのような観点において、高遠山古墳を含む東日本の、弥生古墳以来の古墳の変遷を観察することが、今後の課題であると信じる。

平成二十八年の春、奈良県橿原市の瀬田遺跡で、弥生時代終末期の陸橋付き円形周溝墓（全長約二六m）が見つかった。

また、高遠山古墳の墳形企画が千曲市森將軍塚古墳と同じであるという意見は、偶然の一致で、前方部確立型古墳の多くの墳形比率にありがちな現象であり、そこに楕円形の後円部形態が加わっただけの現象であり、特

これはすでに私が論じている前方部祖形型古墳であり、纏向型前方後円墳に発展する前段階というよりも、前方後円形、前方後方形等にこだわらない大きな枠の中の前方部確立型古墳への前段階というべきものである。

さらに、平成二十九年に、奈良県桜井市メクリ一号墳として墳長二八mの前方後方墳が発掘され、時期は庄内期（三世紀前半～中頃）と報道されている。これは前方部確立型古墳であり、畿内でも前方後円墳、前方後方墳の墳形の確立が認められ、前方後方墳を東海地方での発生とする説に警鐘を鳴らす資料である。

ここでも、私はくどく主張する。前方後円墳・前方後方墳がそれぞれ独立して発生するのではなく、大きな枠の中で前方部付設型古墳の発展形態の中で、古墳形態の変遷があるだけである。

二 前方部確立型古墳の最古式 福井県安保山四号墳について

安保山四号墳は全長二三・五mで、後方部一二×一五・五m・高さ一・三m、前方部一一・五×一二・五mで高さ〇・六mとされている。もちろん土砂の流失があり、古代にはもう少し高さがあったと考えられる。

主体部は後方部にあり、方形土壇であり、箱形木棺などが考えられるとされている。主体部土壇や墳裾などから大量の弥生時代後期後半の土器が見つかっている。

安保山四号墳は筆者提唱の前方部確立型古墳に属し、

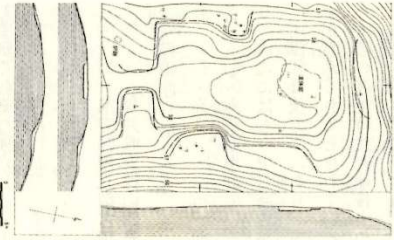
前方後方墳と考えられる。低墳丘をなすこと、弥生時代に属することなど、墳丘墓に属するという見解もあると思うが、それは世界性をもった古墳定義に反し、不適切である。低墳丘の弥生古墳とすべきである。

ただし、四号墳の形態は前方部が幅広く、通常の前方部確立型古墳の形態とは異なる。安保山四号墳は前方部確立型古墳でも日本最古級に属し、弥生後期の畿内第V様式土器後半（二世紀末前後ブラスマイナス三〇年）併行築造と考えられる。日本最古級の前方後方墳の墳形の成立である。



安保山4号墳全景
出典：『安保山古墳群』福井県教育委員会
昭和51年刊行

やや異形の形を成しているが、このような異形のものを経過しながら、後代の典型的な前方後方（円）墳が成立する訳である。な



福井県安保山4号墳発掘後実測図
出典：『安保山古墳群』福井県教育委員会 昭和51年刊行

お、四号墳の後方も隅にも陸橋があることは通有な前方部確立型古墳の形態に準拠しているが、四隅突出型墳との連動からか、陸橋部が幅広である。

安保山四号墳の存在は、東海・畿内のみならず北陸地方でも前方後方墳が早く成立していることを示し、その成立が前代の弥生方墳（方形周溝墓・台状墓も含む）の流行地域で、陸橋部の変化に関連していることを重視すべである。

決して東海地方の狗奴国政権（もっとも東海地方が狗奴国の中心と断定されたわけではない）が、前方後方墳の成立と関係あるわけではない。

前方後方墳も前方後方墳も四隅突出型古墳も同

じような前方部の変遷があるだけで、連動した前方部付設型古墳の発展形態とみて、しだいに前方後方墳が多く登用されるようになったと考えている。

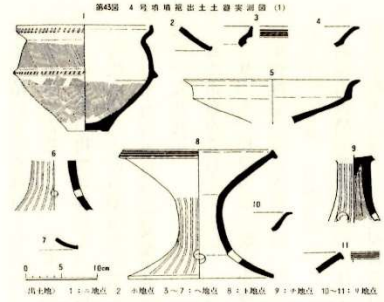
前方後方墳が多くなった理由については、朝鮮半島の円墳の流行とも文化的に連動しているし、日本の円墳の流行とも関係している。古墳時代中期には圧倒的に円墳系古墳が、盛行しているのである。

前方後方墳など円墳系古墳が増えたことは決して畿内政権が関与したものではなく、古墳が大型になるにつれて、設計と造成技術のたやすさから前方後方墳などが便利になり、畿内政権なども権力背景をもとに、巨大前方後方墳を次々に造っていったのである。

そうしたなかで畿内型古墳が成立し、各地の古墳形態にも影響を及ぼしたこともあり、古墳形態の規制もあったと考えられている。しかし、その時期以前に、弥生時代以来の中小古墳があったことはいまうごかしたい。安保山四号墳は典型的な弥生古墳なのである。

三 結語

前方後方墳の高遠山古墳の見方に関して、前方後方墳



福井県安保山4号墳掘土土器実測図抜粋
出典：『安保山古墳群』福井県教育委員会 昭和51年刊行

の安保山四号墳をクロスアップしたが、多くの方は、前方後方墳は関係ないと思われるであろう。しかし、本論で述べたように、前方部付設型古墳の発展形態の内としてすべての形態の古墳を比べる方法は角度を変えて前方後方墳の成立を考察できる。

高遠山古墳が畿内政権の関与で墳形が確立したという証拠はなく、弥生古墳以来の古墳築造の流行のなかで、前方後方墳として墳形が確立したのが高遠山古墳とも

とれるのである。もし、畿内政権が高遠山古墳の成立に関与していたと考える人があつたらば、飯山中野地方は三世紀後半～四世紀前半のいずれかに

この問題は古代史の重要課題であり、断定するには、もう少し時間が必要であろう。高遠山古墳では青銅鏡の出土がなく、積極的に畿内型古墳とする証拠はない。

また、本稿でも墳丘墓名称の矛盾が分かるが、日本中墳丘墓名称に振り回され、真の古墳定義を世界性のなかで位置付けることを忘れている。飯山中野地方でも誰一人として、私の論理の展開を試みる人がいないのは残念なことである。若い人の奮起を期待したい。

注

1 ホームページ『松澤芳宏の古代中世史と郷土史』の「古墳の定義への疑問」を参照。他、松澤芳宏「古墳の定義と墳丘墓名称の廃止について」（北信濃北半を例として）『信濃五九の二』二〇〇七年。この論文で「前方部付設型古墳の発展形態」の内として、「前方部確立型古墳」から前方後方墳・前方後方墳・四隅突出型古墳等として墳形が確立したと論じた。世界的見地から従来の古墳定義や墳丘墓名称の矛盾を突き、言語

学上の墳の文字を尊重した論文であり、弥生時代の墳丘墓も弥生古墳とした。日本の古墳時代は全長八〇m以上の古墳の複数登場をもって位置付けた。世界の古い時代の墳丘のある墓所も古墳とした。

2 中野市教育委員会『安源寺城跡遺跡発掘調査報告書』一九九九年

3 飯山市教育委員会『法伝寺二号古墳』一九九七の報告に基づき、松澤芳宏「飯山市静岡の法伝寺二号古墳の年代推定―東日本最古級の前方後方墳の可能性について―」『高井』二百五号』二〇一八で考察。

4 高遠山古墳の概要については中野市教育委員会『長野県中野市高遠山古墳発掘調査概報』二〇〇〇年を参考にしている。

5 報告書では組み合わせ式箱形木棺を思わせる記述もあるが、細長い粘土槨の断面形状はU字型であり、土屋積「高遠山古墳の現在と将来(1)」『信濃考古一七〇号』二〇〇二年の説に従った。ただし断定できるものではなく、今後の類例を待ちたい。

6 注1の『信濃』掲載論文に、この地方の古墳出土土器年代観を述べてある。

7 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告書』一九八三年

8 藤田富士夫「富山県における古墳発生前期の調査とその成果」『古代学研究七六』一九七五年

9 福井県教育委員会『安保山古墳群』一九七六年

その他の参考文献

本稿はインターネット「松澤芳宏の古代中世史と郷土史」の一項である「中野市高遠山古墳の見方」(二〇一〇・九・八記、九・二三更新)に、若干の見解を追加し再編したものである。